都立高校における外国人生徒等に対する日本語指導を組み入れた日本語教育実習

木山 三佳 (明海大学外国語学部)

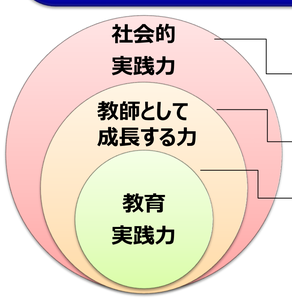
概 要

都立高校における外国人生徒等に対する日本語指導を行うことを現場での実践とする「日本語教育実習」の授業では、日本語指導が必要な児童生徒についての基本的知識、日本語の授業の指導計画、活動のデザインなどを学び、模擬実習を繰り返しながら、外国人等高校生への日本語指導支援を継続している。多文化教員養成モデル(齋藤他2011)では、「教育実践力」「教師として成長する力」「社会的実践力」の3つが相互作用的に育成されると考えているが、本発表では、この3つの力の側面から外国人生徒等に対する日本語指導を組み入れた日本語教育実習の成果を整理した結果、継続的な実践、振り返り、修正により、多文化教員の資質・能力が養われていることが示唆された。

Ⅰ. はじめに

日本語指導が必要な外国人等生徒に対する日本語支援は、進学・就職を控える高等学校において喫緊の課題である。明海大学は、東京都の在京外国人生徒対象入試を行う都立高等学校５校と教育連携協定を結び、このうち4校の日本語指導が必要な生徒等を対象として、2016年度より学生による日本語指導支援を行っている。この活動の主体となっているのは、日本語学科専門科目「日本語教育実習」を履修している学生で、日本語教員を目指す学生や国語科教職課程を履修している学生など25名程度で留学生も含まれる。学生は実際の高校の教育現場に行って実情に触れ、それぞれが課題意識を醸成し、生徒や他の学生、教員との協働の中で様々な学習を作り出す機会となっている。

Ⅱ. 授業・研修等の実施計画



社会的実践力	• 「理念」の形成とそれに基づく意思決定 • 社会・地域の教育コミュニティのデザイン
教師として成長する力	• 自己の成長 • 環境づくり
教育実践力	• 現場力 • 共感的批判的理解 • 知識・技能

【図１】 多文化教員養成モデル(齋藤等2011)

【表１】授業の実施計画

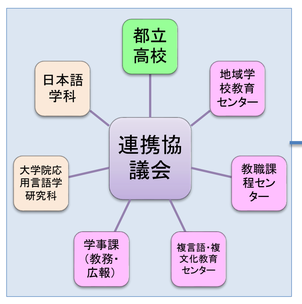
活動展開	時間	モデルプログラム	多文化教員の資質能力
外国人児童生徒等に関する基本知識	90分×１	①外国人児童生徒教育の考え方 ③受け入れの現状と施策 ⑫外国人児童生徒等の心理と適応	•知識・技能 •「理念」の形成
日本語指導の知識	90分×６	⑰日本語指導の理論と方法	• 知識・技能• 環境づくり
模擬実習	90分×８	⑰日本語指導の理論と方法	• 現場力• 共感的批判的理解 • 自己の成長 • 環境づくり
実習	60～120分/回	⑭現場での実践	•現場力 •自己の成長 •環境づくり •「理念」の形成とそれに基づく意思決定 • 社会・地域の教育コミュニティのデザイン

Ⅲ. 実習の計画から実施、発表まで

●実習の計画
都立高校の管理職・外国人生徒等指導担当者、および学内の関係部署の担当者により、連携協議会を3月、9月ごろに開催、事業計画に係る評価を行い、年度計画の策定、連携実施にあたっての話し合い、調整を行う。その場で、指導対象生徒や指導の目標、指導方法などについての大まかな方針を決める。年度計画に基づき、日時、人数、使用教材などの具体的な日本語指導支援活動計画を作成。

●模擬実習の実施
４技能や語彙、統合型などのテーマで３名が同時並行で模擬授業を行う。教材分析、教案作成、練習は２週間前から行う。授業後にフィードバックと評価を学生相互、教師で行い、教案を改善しつつ３回授業を行う。

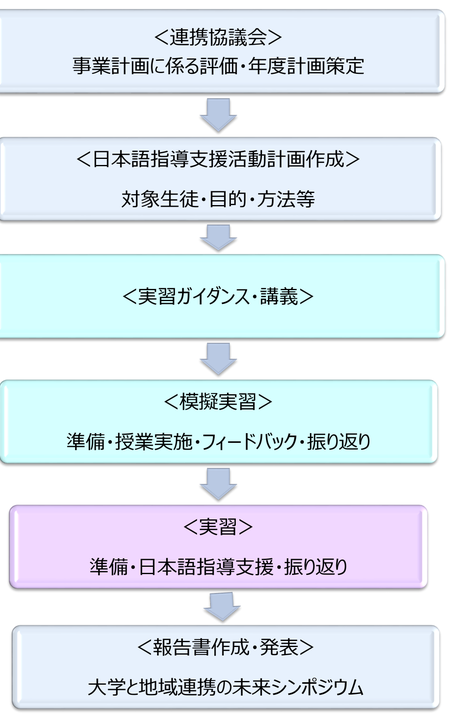
●高校における日本語指導支援
２校は、基本的に週2回、各回２時間行っている。各校で対象生徒は15名程度、レベル別に２～４クラスにする。学生は教員、先輩、友達などに相談しながら、教材分析、活動デザイン、教案作成、練習などを２週間前からチェックを受けながら行う。実習後、報告、振り返り、教材をグーグルドライブに提出する。



【図２】 連携協議会参加機関等

【図3】 模擬実習の様子

【図4】 高校での日本語指導支援の様子



【図５】 授業の計画から実施、発表までの流れ

Ⅳ. 高校における日本語指導支援の概要

高校の通常授業実施期間および夏休み、春休みに、午後の授業が無い学生が日本語指導支援に行く。予定は教員間で管理、学生同士で連絡して行動をともにする。

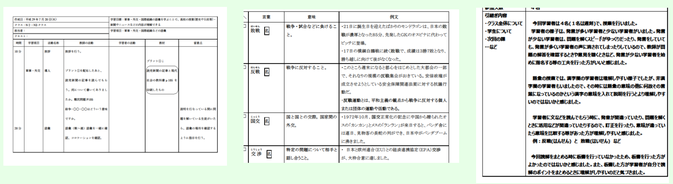
【表2】授業の実施計画

	A 高校	B 高校	C 高校	D 高校
回数・時間・クラス数	35回×2h×２クラス	10回×2h×3クラス	37回×2h×４クラス	6回×1時間×３クラス
対象生徒数	19名	31名	24名	15名
参加学生数	13名	9名	17名	10名
内容	文法・読解・漢字	文法・読解・漢字	文法・読解・語彙	統合型・会話

Ⅴ. 成果

1. 教育実践力

日本語指導への継続的な参加によって、学習者の反応をくみ取る余裕が生まれ、次の指導に工夫をする。



【図6】学生が作成した教案（左）・ 語彙リスト（中）・ 報告書（右）の例

【図7】学生が作成したロールカード（左）・タスクシート(中/右) の例

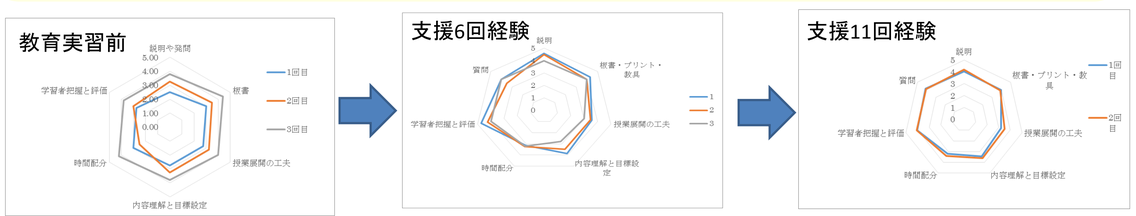
学習者のモチベーション喚起のために、話題選びや視覚的な工夫をした例

【図8】 学生が作成した読解補助教材の例

背景知識を補う補助教材を作成し、教科学習との繋がりを意識させる工夫をした例

2. 教師として成長する力

継続的な参加者の模擬実習評価および、他学生のコメントと本人の振り返りの変化を以下に示す。当初は教案どおりに授業を進めることに意識が向いてるが、日本語指導支援の経験を経て、学習者の理解に意識が向き、対応力、授業に対する入念な準備等を中心に実践力が向上している。



他者コメント

2年後学期
教案を見ている。/ 声が若干小さめ。何の説明か言わないで、内容が切り替わるので唐突に感じる。/ 可能の説明が分かりやすい。赤の使い方が良い。/ 板書よりも文字カードを使った方がスムーズ。

3年前学期
全体的に慣れてる感じがしてよかった。/導入を終わった後, 文型を書いておくともっと見やすい/絵カードなどあるからわかりやすい。説明もゆっくりでききやすい。/「暑い」と「暖かい」の違いがわからなかった。初球はもっと細かい範囲まで対応できる準備が必要。

3年後学期
先生感がすごい/ わからない、と学習者が言った時に、きちんと説明してくれた。皆の様子も絶えず見ている様子だった。/ 学生の顔を見て、必要があれば説明を加えているところがよかった。口頭説明やジェスチャーは丁寧だったので、板書でももう少しあるとより理解が深まると思う。

ふりかえり

1回目： グダグダしてしまった。
2回目： すこしはスラスラと進めた。
予定の時間配分より遅くなっていた。
3回目： 1回目、2回目よりも少し進めた。

感想：聞きやすさを意識したので、評価され嬉しい
課題：語彙や用語を精査する。きちんと練習する。
抱負：1回目からスムーズな授業を。学習者が理解しやすいように準備する。質問しやすい雰囲気を作る。質問に答えられるように調べておく。

【図9】 模擬実習評価票、コメント、振り返りの変化

3. 社会的実践力

教育に対する理念の形成：自分よりも学習者のしたいこと、困っていることに理解を示し、自分の授業を変えていこうとする、そしてそれを楽しもうとするようになる。
外国人生徒等を巡る人(高校の教員・他の日本語指導者など）と情報を共有し、課題の解決にあたろうとするなど、教育コミュニティに能動的に参加するようになる。

Ⅴ.まとめにかえて

日本語指導が必要な外国人等生徒に対する日本語指導支援への継続的な参加は、学習を作り出すフレームワークとなっている。「分かりやすさ」や「学習者への対応」など授業を想定した教科内容の知識の発達には時間がかかる(木山2014)ものだが、実習生は継続的な日本語支援の参加により、内省を繰り返しながら、生徒の視点と生徒が必要としている教科学習やその先の就職や進学といった進路を具体的に想定するようになる。高校の教員や他の日本語指導者との信頼関係を築きながら、自分の指導内容を再構成したり、よりよい学習環境に変えようしたりする。このような実践、振り返り、修正というサイクルを何度も繰り返すことで、本来は就業後に自然に身に付く資質や能力が養われていると感じる。また、大学院生を含む異学年の学生との協働、あるいは、国語科教職課程を履修している学生と日本語教育専門で勉強している学生の協働など、自分のできないことや知らないことを直接学ぶ機会が多いことも良い点である。 課題としては、①連携協議会を中心とした組織的な運営が不可欠であること、②学生間の連絡をし易くし準備活動の場などを確保することなどがある。

参考文献・参考資料
１．木山三佳(2014)「模擬実習によって何が変わるのか － 実践的教育能力をつける日本語教育実習をめざして -」『明海大学外国語学部論集』, 第26集
２．齋藤ひろみ他（2011）科学研究費基盤（c）20520461『学校の多文化化で求められる教員の日本語教育の資質・能力とその育成に関する研究』報告書
３．日本語教育学会(2018)『平成29年度文部科学省委託 外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業-報告書-』

文部科学省委託事業「外国人児童生徒等の教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」
2018年度シンポジウム「モデルプログラムを活用した授業・研修事例」報告